



タツノオトシゴ

分類 ヨウジウオ目 ヨウジウオ科
 学名 *Hippocampus coronatus*
 英名 Sea horse

タツノオトシゴは魚ばなれした顔貌と姿体のために16世紀までは獣か魚かと論議されたが純然たる魚類で、ギリシャ神話に出てくる海馬にそっくりで、英名も Sea horse と呼ばれている。日本での標準和名はタツノオトシゴであるが、方言は馬にみたてた地方と、竜にみたてた地方との二つに大別される。即土佐のウミウマ・西日本のウマ・富山県のウマノカオ等、他方高知のタツノコ・神奈川のリュウノコ等、それぞれ馬か竜に由来している。一般的に魚の方言はその由来するところが判然とせず理解し難いものであるが、タツノオトシゴの場合、はっきりその語源が二つに分類されるということは姿体よりの万人の印象がより強いものであるからであろう。

タツノオトシゴは温帯から熱帯にかけての静かな内湾のアジモの繁茂するところに生息し、体長5~6cmであるが、熱帯海域に分布するオオウミウマ(*Hippocampus kuda*)は体長30cmに達する大型種である。体色は黄褐色か暗褐色であるが生息環境により個体差が大きい。

体表は昆虫のような硬い外皮でおおわれ、頭部や体全体に棘があり、頭部には良く発達した頭冠がある。胴部には10本尾部には38~48本の体輪がある。背鰭と胸鰭はあるが腹鰭と尾鰭はない。尾部はサルの尾のようにものにまきつくに都合よく出来ていて、海藻等にまきついたグラビヤにしばしば見られる光景である。前方に突出した口吻には歯がなくスポイトの様に水と共にプランクトンを吸い込む。他の魚類の仔魚も吸い込むこともあるが、口の構造より餌料は限定され小型のプランクトンが主なものとなっている。タツノオトシゴは鰓蓋と肩部と

が癒合退化し、この上部に小さな鰓孔口があって、あまりにも小さいので片側の鰓孔より水を取り入れ、他方の鰓孔口から吐き出すという特殊の呼吸を行っている。

泳ぎ方は小さな背鰭と胸鰭とをせわしく動かし乍ら直立したまま進行する所謂立泳ぎで、進行方向に頭を向ける事により方向転換が行われ頭は舵の役目をする。

タツノオトシゴの雄は雌よりも小さいが、雄は成熟すると男性ホルモンの影響で腹部に袋が出来る。これは腹壁から分化したもので育児袋と呼ばれ、雌はこの中に約200ヶの卵を産みつける。約40~50日間で孵化し、十分に成長する迄仔魚は育児袋の中に収まっている。卵を受け入れるとき袋の口は大きく開いているが、発生及び仔魚育成中は口がつまり、仔魚が飛び出すとき所謂出産時には再び大きく開くが放出は1回では終らず数日にまたがるので、個体により疲労困憊し斃死するものも出てくる。

日本の海岸地方では古くから、雌雄一対を干物として身につけていると、安産の御守りになると信じられているが、雌が保育せず雄の育児袋の中で行われ且又出産の苦しみをタツノオトシゴが味っている事を果して知っているであろうか。



タツノオトシゴ

分類 : ヨウジウオ目 ヨウジウオ科
 学名 : *Hippocampus coronatus*
 英名 : Sea horse
 和名 : シミウマ, ウマノカオ, ヲウウマ

世界各地、温帯から熱帯にかけて分布し、日本では静岡から入江までの湾のアジモ、アサギニ生息している。体長は普通 5~6cm 程度の小魚類だが、オオウミウマは体長 30cm 達する。体色は茶褐色に、口吻は生息場所により赤褐色、緑色に染み入ることがある。体表は丸く、胴部及尾部の多数の体輪がある。背鰭と胸鰭は腹鰭と尾鰭は無い。頭部は長く発達した頭冠がある種もあり、犬歯は色々である。頭と体全体は皮膚質、糸状突起があり、多数に区別される。繁殖はオオウミウマ、腹鰭、背鰭、胸鰭、尾鰭、胎生と同様である。食餌は小動物プランクトンが地味魚類の好餌である。本属の次に分る種を分類する。

サンゴタツ (*Hippocampus japonicus*) オオウミウマ (*Hippocampus kuda*)
 ハナタツ (*Hippocampus mohnikei*) タカラタツ (*Hippocampus takakurai*)



ニュージーランド
-1990



ユーゴスラビア
-1966



タンザニア
-1967



ブルガリア
-1961



バルバドス
-1965



ケイマン諸島